

Asian Volunteer Report

Oct 2008



アジアンボランティア

ボランティアサポート基金へのご協力に感謝します。これからもどうぞよろしく。

6月の募金キャンペーンと同時に、ミャンマー・ビルマの洪水と四川大地震被災地支援の募金を行いました。集まった2万円を等分し、1万円ずつミャンマーの盲学校（斎藤聖一教授経由）と、日中友好協会（任利講師経由）に支援金として贈りました。ご協力ありがとうございました。

05年にタイ南部の津波被災地の復興支援に赴きたいという卒業生を支えようと活動を始めてから、6ヶ月のサイクルを6期終了、現在7期目の途中です。

第3期以降は、夏のカンボジア日本友好学園での教育ボランティア活動に参加する学生および、大甕町商店会の主催する「交流祭」に「出張アジアンバザール」として出店する学生の交通費補助として使われてきました。

また、学園祭アジアンバザールのための買出し資金を貸与し、バザール終了後に回収するというかたちで、アジアンバザールをサポートしてきました。

アジア地域でのボランティア活動に取り組みたいという人をサポートするための基金です。「こういう活動に資金援助をしてほしい」という提案を随時受けつけています。

サポート基金の会計は次のようになっています。要点だけですが、会計報告とさせていただきます。

第6期終了時点（08年5月末）での残金	250,274円
第7期に（現在までに）寄せられた寄付金	148,552円
現在の基金の残高は	398,826円
で、うち、AsianBazaarに	160,000円

を貸し出しています。

アジアンバザール終了後、買出し資金がサポート基金に返却されますので、夏のカンボジア・プログラムに参加した学生に各2万円を支給する予定です。

12月にはサポート基金の第8期に取り組みます。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

目次

- 1 / 金子竜也 / 意識があればどこにだって行ける
- 2 / 鴨志田純沙 / 何でも自分の目で確かめてみないと
- 3 / 大竹貴子 / 当たり前がなくなったとき
- 4 / 吉田優 / 初めての海外がカンボジアでよかった
- 4 / 越沙央里 / 本当に自分にできるのか？
- 6 / 和田未萌 / 何も無いのに、すごく心が満たされていた
- 7 / 橋本麻美 / 満天の星に鳥肌が立つほど感動した
- 7 / 梶山真矢 / 大切な人たちととてもいい時間を共有できた
- 8 / 大貫貴子 / だいぶ変わっていたカンボジア
- 9 / 永井広美 / もう友好学園にはこれないだろう
- 10 / 坂本亜希子 / 懐かしい気持ちで、校舎を歩き回った
- 10 / 金澤悠 / I Love Cambodia
- 11 / 向恒生 / ウキウキしながら生きよう
- 12 / 藤田花江 / たくさん元気をもらった3度目の友好学園
- 12 / 平根拓也 / 自分でもこんなガラじゃないと思っていた
- 13 / 塚田信 / 本当の豊かさは物質的なものではない
- 14 / 鈴木麻由 / この子供たちも私と同じ時間を生きている
- 14 / 鈴木恵理華 / またあの笑顔に会いたい
- 15 / 本多亜依 / カンボジアで見たこと考えたこと
- 16 / 任利 / カンボジアから帰ってから
- 17 / Patrick Stephens: Cambodian Sketches
- 18 / Harris Ives: Cambodian Sketches
- 20 / カンボジア日本語・英語教育ボランティア会計報告



意識があればどこへだって行ける

文化交流学科 3年 金子 竜也

この経験はすべてが新鮮であった。初めは何気ない気持ちでこのプログラムに参加した。ただ海外に行ってみたいという気持ちだけであった。私たち日本人は少しバイトを頑張れば簡単に海外へ行ける。その上学生であるがゆえに親のすねもかじれる。私たちにとって金は生活、娯楽、物欲によって消えていくのである。そんな環境すべてが当たり前化されているため、小さな幸せに気付かなくなっている。カンボジアではそんな濁った心をリセットすることができた。日本のような先進国を羨ましく思う人たちがいっぱいいることを認識しておかなくてはならない。

カンボジアはとても貧富の差が激しい国であった。スラム街で生活をしている人たち、ゴミ山で生活をしている人たち、電気や水道もない生活をしている人たち、ありとあらゆる真実を目に焼きつけた。金持ちは高級車を乗り回し、貧乏人はゴミでも拾っているという印象であった。それはとても考えのつかない光景であった。夜道を子どもがリヤカーを押してゴミを拾っている。お金がなくて学校へ行きたくても行けない子どもたちがここにはいっぱいいる。そんな勝手な想像ばかり懐いた。でもなぜか笑っている人たちを多く見かける。貧しい生活をしているのにも拘わらず苦を見せずにいる。きっと私たちの情けはいらなないといった光景でもあった。

確かに金をせがんでくる大人や子どももいた。なぜか私はそれを見て金を渡さなかった。今思うと募金など援助をするなら、金をせがんでくる人たちに金を渡したほうがよかったかもしれない。でもあの時は同情をしなくなかった。今でも思い出すと胸が



いたくなる。カンボジアにいる金持ちが憎くてしょうがなかった。だが現実を受け止めるしかない。そしてきっと私の器では何もできない。

友好学園での生活は私にとって出会いの場であった。子どもたちとの出会い、通訳の学生との出会い、すべての出会いは私にとってこれからの力になった。友好学園にはバスケットコート、バレーボールコート、サッカーゴールがあった。だがあまりボールを持っている子がいなかった。それにはすぐ心が打たれた。幸い友好学園にくる前の日にサッカーボールを5ドルで買ってきた。そのため子どもたちと楽しくバスケットボール、サッカーができた。だがそこに予想外の問題が生じた。子どもたちはルールを分かっているようで分かってはいなかった。その時この学校にはスポーツを教える人がいないと確信した。少なくとも友好学園には体育といった授業がないようだ。子どもたちにとって学校はあくまで勉強を

教わる場所ではないのである。確かにこの環境を見ていけば分からなくもない。子どもたちにとって学力が将来を左右するといっても過言ではないからである。それは通訳の学生を見ていても身に沁みて伝わってきた。日本とでは勉強に対する意欲、ハングリー精神がまるで違った。日本での努力はカンボジア人にとって努力の名に値しないと感じた。

私はこのプログラムを通し確実に視野が広がった。世界には自分より貧しい人たちがいっぱいいる。それを皆さんの目で確認してほしい。ウルルン滞在記では伝わらない感動がそこには待っている。



何でも自分の目で確かめてみないと

現代英語学科 2年 鴨志田 純沙

私はタイ・カンボジアに合わせて30日間滞在しました。これが私にとって初めての海外となりました。旅では毎日見るもの、することが初めてのことばかりで、それによって色々なことを発見したり、感じたり、学んだりすることができました。まず、最初にタイを観光しました。バンコクのスワンナプーム空港からカオサンへタクシーで向かっている途中、タクシーの窓からタイの景色を見て、今自分は日本ではなくタイに来ているんだと実感しました。きれいな空、カラフルなタクシー、次から次へと目に入ってくるものが新しいものばかりでした。カオサンには旅行者が多くいて、とても賑やかで夜中になってもお祭り騒ぎでした。最初は圧倒されましたがすぐに慣れて大好きになりました。

しかし、カンボジアでは着いてすぐにショックを受けました。タイからカンボジアへ国境を越えた途端に周りの雰囲気が一変したのを感じました。寂しげな雰囲気

でとても不安な気持ちになりました。そして、いきなり目の前に飛び込んできた光景に動揺しました。国境では、靴を履いていない人をよく見かけました。私たちを見るカンボジア人の視線に怖さを感じました。一番ショックだったのは小さな子供たちの物乞いでした。とても心が痛みました。また、騙されたり怖い思いもしました。

だけど、リング村での生活でカンボジアの良いところが沢山見えてきました。村の一日は、午前中は授業をして、午後からは市場へ買い出しに行ったり、教会やお寺や病院を見学に行ったり、子供たちとバスケットボールやバレーボールをしたり、折り紙を折ったり、クメール語を教わったりして過ごしました。

村はのんびりとした雰囲気、周りには田んぼ、畑、高床式の家、ヤシの木、牛、鶏、たまに道端に豚がいました。そして道歩いていると必ず小さな子供たちが元気よく「こんにちわ〜」と声をかけてくれます。そ

うしてカンボジアの人達の優しさに触れているうちにカンボジアが大好きになりました。生徒達はみんな一人一人がキラキラした目をしていて、素直で、やさしい心を持っていて、勉強に対する姿勢が積極的でした。見習わなければならないところが沢山あります。

これから、この旅で学んだこと、一生懸命な彼らを見て、自分が今やるべきことを精一杯頑張っていこう！と決心しました。このことを常に心がけていこうと思います。そして必ず成長してまたカンボジアを訪れたいです。何でも自分の目で確かめてみると分からない。この旅で痛感しました。

最後に、こんなに充実した毎日を送れたのは周りの方々の支えがあったからでした。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



当たり前がなくなったとき

文化交流学科 3年 大竹 貴子

私が今回、このプログラムに参加したきっかけは、2月に行われた「文化交流体験」に参加し、カンボジアという国に大きな魅力を感じたからだ。日本では見ることのできない風景、地平線、空気、そして人々のエネルギーに満ち溢れる姿、なにより人懐っこい人柄がカンボジアの魅力といえよう。

やはりその私のカンボジアのイメージが覆されることはなかった。人々は本当に優しく、とても人懐っこい。そして無邪気であった。学校の生徒は活発で大変勉強熱心である。私たちの手探りの授業も体全体で受け止めてくれた。外に出れば、誰かしらに声をかけられる。近所の子供たちはまだ小さいのに「こんにちは！！」と満面の笑みで手を振ってくれた。その姿は本当にくたくたがなく、愛らしくて仕方がないものだった。すれ違う人、すれ違う人、日本人が珍しいのであろう、興味津々というかんじに私たちの顔を覗き込んできた。しかし、その表情には曇りが全くなくとても暖かなものであった。

生活はとても便利とは程遠いものであった。しかし、不思議なことに苦痛ではなかった。当たり前のもがないという空間は、「当たり前」の中で生活している私たちにとっては、異空間である。きっと私一人では苦痛でしかたなかったであろう。出来ないこ

ともたくさんあったと思う。逆にいえば出来ないことしかなかったかもしれない。しかし、そこを埋めてくれた仲間がいた。仲間がいなければこの旅はここまで素敵ない出には刻み込まれなかったであろう。

不便な生活を知ったからこそ、得たものもたくさんあった。電気、水の大切さ。日本にいれば当たり前存在する現実がここカンボジアではとても尊いものなのだ。当たり前が当たり前でなくなったとき、初めてそのものありがたみを人は知る。しかし、物に満ち溢れている日本において、それに気がつくことは難しい。そうして人は時間の流れとともに、少しずつ少しずつ忘れてしまったのかもしれない。

電気がない、それは大変不便であった。しかし、だからこそ夜空に広がる満点の星の輝きに出会うことができた。空の広さを実感することができたのだ。しかし、私が苦痛に感じなかったことの裏には、陰で懸命に働いていた人たちがいたからなのだろうということを忘れてはいけない。彼女、彼らには大変負担をかけてしまったと思う。そう思うともっと何か自分から動けたことがたくさんあったことに気がつく。彼ら、彼女達には本当に申し訳なかったと思うと同時に感謝の気持ちでいっぱいになる。もし、来年もこの活動に参加できたなら、次はその意思をしっかりと受け継がなくてはいいな

いと思った。

ここカンボジアが私は本当に大好きである。ここの生徒たちは本当に心の豊かな子ばかりであった。私の腕がゴムの跡で赤くなっているのに気が付き、赤くなった部分を心配して違う場所につけなおしてくれた子がいた。しかもそれが1人、2人ではないのだ。綺麗な花をたくさん摘んできてくれた。髪にさしてくれた。髪を丁寧に結ってくれた。その手つきから、普段きつと兄弟にやってあげていることが伝わってきた。砂埃で汚く汚れた私の爪の汚れを自分の爪でとってくれた。与えて、与えて、与えて……でもその裏には何の見返り要求も感じられなかった。ただただ、人のために優しさを注ぎ続けるのだ。とても心の豊かな子供達である。そんな暖かな環境に、私は何度涙したか分からない。それだけ子供達の優しさは人の心に響くものがある。

最後の授業の前日、いつものように遊びに来た数人の生徒と一緒に話していた時、一人の生徒が別れを惜しんで涙を流してくれた。すると他の子供達もつられて泣きだした。その涙があまりにも綺麗で私まで涙が止まらなかった。虹がとても綺麗な日だった。私は果たして彼女のような、こんな綺麗な涙を流したことがあったらだろうか？今でもこの日のことを思い出すと胸がいっぱいになる。

今回授業に踊りを入れた。それは、ある意味私達がいなくなっても何か形に残るものを残したかったからだ。しかし、授業が終わった時結局私の方がたくさんのもをもらっていたことに気がつく。本当に生徒たちは頑張ってくれた。最後に見ることが出来たみんなの笑顔が何より私にとっての宝物だ。

日本は物に満ち溢れていて、とても便利で物質的には豊かな国だ。しかし、それが故大切なものをドンドン失いつつあるのではないかと思う。ものごとに鈍感になっている気がするのだ。失ってからでは遅いのだ。しかし残念なことに、当り前のものほど人は鈍感になり、疎かになってしまう。私もその一人であった。しかし、それがどれほど大切なことかたくさんの人との出会いと優しさによって振り返ることができた。私は夏を一生忘れることはないであろう。最後に子供達の幸せを心から願いたい。そして彼らとした、「また必ず会いにくるから」という約束を絶対に守らなくてはと心に刻んでいる。

初めての海外がカンボジアでよかった

看護学科 1年 吉田 優



この夏は私にとって初めての経験ばかりであった。なにより海外自体が初めてだったので出発前は不安や楽しみで心臓がバクバクしていた。「一ヶ月がんばろう」とはりきっていたのにタイで先輩達と合流してからは何から何までお世話になるばかりだった。

カンボジアにはタイの旅行会社で買ったツアーで向かった。バスでの移動だったのだが国境を越え、シェムリアップに向かうバスに乗り換えるとき、この旅で一番のピンチを迎えた。バスの待合室で「バスはこない。金を払ってタクシーに乗れ。安くしてやる」と言われ、悩んでいるうちに気づけば一緒に移動してきたはずの欧米人達の姿は消え、その場に残されたのは日本人ばかりになっていた。やはり日本人はカモになりやすいのだなぁと実感した事件であった。

プノンペン待ち合わせのホテルでボランティアのメンバーが全員集合し、小さなバンにぎゅうぎゅう詰めで友好学園のあるプレイベンに移動した。街から離れるにつれ、青い空と緑の田んぼが広がっていった。学園に到着して校舎を見て、思っていたよりもずっと広くて立派なことに驚いた。友好学園は入学試験もあり、卒業後大学へ進学する人もいてカンボジアの中でも恵まれた学校なのだと思う。「ここで2週間授業を教えるのか」と考えると緊張した。

学園での最初の作業は寝床を作ることだった。教室の床を拭き、机を重ね蚊帳を張り、中にゴザをしいたら居心地のいい寝床ができた。次の日からは早速授業が始まるため5時起きだった。いつも歯磨きをしながら朝日を眺めていたのだが、雲の色や

太陽の色が日によって全く違うので毎日感動した。6時からの朝ごはんはボリューム満点。一度カエルのから揚げが出てきた時は驚いたがおいしかった。朝ご飯を食べて外にでるとすでに学校には生徒達の姿があり、私達も授業の物品を持ち各クラスに向かう。私達の班は日本語で「これはなんですか?」のような文と単語を教えた。始めの方の授業ではどうしたらいいのかわからず生徒に近づけずにいたが、班で話し合い「生徒を一人一人見る」と言うことを徹底して授業をすすめると生徒の理解も深まり授業への参加も積極的になった。黒板に新しい単語が書かれるとすぐにそれをノートに写し「せんせ!せんせ!」と呼ぶ。単語を指差し、「何と読むのか」と私を見るので読み方を発音するとカタコトで繰り返す。そんな勉強熱心な姿を見るのがとても楽しかった。回を重ねるごとに難しくなる授業だったが生徒は一生懸命ついてきてくれたし、私達もそれに答えるために一生懸命に工夫して授業を行うことができたと思う。

授業の後はここでの生活で必要な仕事(洗濯、水汲み、買い出し等)が終わってれば自由に過ごせた。昼寝をしたり生徒と遊んだり近くの寺や教会を見に行ったりと、カンボジアの強い日差しの下では何をして大量の汗をかき、心地よい疲労感と充実感で満たされていた。夕飯を迎えるころには日は沈み始めている。食後のミーティングの時間になれば真っ暗で、バッテリーにつながた電灯が一つと各テーブルに燈されたりそくの明かりの中で授業の内容やクラスの雰囲気や班ごとに発表し、情報を交換し合った。クラスの雰囲気を踏まえた上

で授業の準備や内容の確認を行い明日に備えた。全てが終わって外に出ると見たこともないような数の星が空一杯に輝いていた。班の先輩たちとコンクリートにねっころがり星を眺めたのはこの夏の楽しかった思い出の一つである。

カンボジアにいる間は学園を卒業した学生達が通訳やガイド、水汲みや荷物運びとして私達の生活をサポートしてくれ、夜になれば話したりゲームをしたりで笑い声が絶えなかった。学生達は頼りになり昔からの友人のように親しくしてくれ本当に嬉しかったし心強かった。また看護学科に通う先輩とカンボジアの医療や保健について学生から話を聞いた時も、難しくてなかなか伝わらない日本語もあったが質問には一生懸命答えてくれた。近くの病院を見学に行くこともでき、実際に患者さんと会話することやどのような治療にいくらかかるのかといったことを調べることができた。カンボジアの医療状態を知るととてもよい経験になった。

学園を離れてからアンコールワットも3日間見に行ったが、その他にも孤児院やゴミ山、スラム街などを見学に行ったことでカンボジアの現状を改めて突き付けられた。しかし、そんな苦しい生活の中でも子どもたちの笑顔は生き生きとしていた。

初めての海外がカンボジアでよかったと心から思う。子どもたちの笑顔はいつまでも忘れないだろう。この旅ではみんなにお世話になってばかりで、迷惑をかけることも多かったので、次に旅をするならばもっと自分自身が成長してから行きたい。

今回、様々な面で私を支えてくれた先生や先輩やカンボジアの学生には感謝してもしきれない。多くの人に支えられ、自分を見つめなおすことができた旅だった。

本当に自分にできるのか?

文化交流学科 3年 越 沙央里

思わぬ参加……。

「アジアンボランティア」。いま思うと、このプログラムに参加できたことは偶然ではなく自分の決められた運命だったのかもしれない。運命とは大げさかもしれないが、このプログラムに参加することは自分でも本当に予期していないものだったのである。もちろん、このプログラム自体は1年生の

ころから知っていたし、去年はプログラムに関連するアジアンバザールというのにもカフェスタッフとして参加していた。今年2~3月には授業でタイ~カンボジアにも行った。

そこまでして、なぜこのプログラムに自分は参加することはないだろうと思っていたのかということ、それはその期間に生



活する環境に不安があったからである。友好学園で日本語を教えている2週間は学校で寝泊り。電気も水道もなく、お風呂は井戸水、洗濯はすべて手洗い、寝るのは雑魚寝。その話を聞いたとき、真っ先に思ったことは「ありえない、無理」の二言だった。日本でなんの不自由もなく甘ったれて生きている私にとってはあまりにもかけ離れた環境だったのである。

また、今年の夏本当はアメリカに留学するはずだった。留学の手続きも済み、何度かのミーティングもしていた。どこで飛行機のチケットを買おうかというところまでいっていた。しかし、突然この留学が打ち切りになってしまったのである。多少の不安はあったものの、昔から夢だった留学が現実になる!! 苦手な英語もこれを機に克服するんだ!! と意欲に燃えていた私はただただ呆然とするだけだった。しかし、「どうしよう」と途方に暮れている私の隣で、この留学と一緒に行くはずだった友達が、「じゃ、私アジアボランティアに参加しようかな。みんなもいるし」とあっさりこのプログラムに参加することを決めてしまったのである。確かに、このプログラムには早くから私たちの友達が多く参加していたのである。それを聞いた私は、「そうだよな、みんないるし……長い夏休み何もしないなんてもったいないし……」と、急な展開にはぼんやりとした状態で頭で参加することを決断してしまったのだ。

今考えると、皆がカンボジアの子供たちに日本語を教えたい!! という素晴らしい目的を持って参加しているというのに、自分は本当にふざけた無責任な動機だったなと恥ずかしくなる。

期待と不安

参加が決まったらやるのがたくさんあった。全体的話し合い、授業の準備、また、私たちのグループは2週間のボランティア参加+観光(ベトナム→カンボジア→タイ)の31日間の旅だったのでその荷造り。

行くこと決めたら、早く行きたい!! と楽

しみになってきた。授業で何をしようか、どうやったら子供たちが楽しんで日本語を勉強できるか考えて準備することもとても楽しかった。しかし、その反面不安もあった。今まで日本語を教えるための勉強などしてきてないし、普段自分が使っている日本語が本当に正しいのかすら疑問な自分が教える立場に立ってよいのかと。

また、1ヵ月という初めての長旅。けして治安がいいところではない国々。しかも自分たちだけで。考えれば考えるほど不安が押し寄せてきた。そして、期待と不安が入り乱れるなかで旅はスタートしたのだった。

友好学園へ

ベトナムからひたすら船に乗りカンボジアに入った。プノンペンで一泊した後、バンに乗り2時間かけてついにプレイベンの友好学園へ。友好学園は思っていたよりはるかにきれいだった。学園のまわりも確かに田舎であるが、学園の横にはパン屋さん、その前にはおいしいサトウキビジュースが飲める小さなお店、少し歩けば市場もある。そしてなによりも周りの田んぼだらけの風景が日本の自分の家がある場所となんら変わらない……。そんなことに面白さを感じつつ学園へ入った。

学園にはすでに子供たちがいて、容赦なく照りつける太陽の下で遊んでいる子や青々とした木の下で日陰をしている子もいた。その光景はとてつもなく穏やかでゆっくりとした時間が流れていた。何人かの子供たちが近づいてきてくれて話をした。彼らはノートに書いた日本語を見せてくれたり、一生懸命日本語で話しかけてくれた。私もカンボジア語の会話帳を片手に一生懸命彼らとコミュニケーションをとった。

ほとんどお互いの言葉は通じない。けれど、相手がなにを言おうとしているのかわかるうとしたし、相手も分かるうとしてくれた。そのやり取りがとてつもなく楽しかった。「明日から2週間ここで教えるのか……。」来る前の不安はどこへやら、私は楽

しみでしょうがなくなったのだった。

かけがえのない時間

朝早くから子供たちは学園に来ていた。何人の生徒が集まるのか始まるまで分からないという状況の中で、今回生徒は300人以上も来てくれた。そして、生徒でいっぱいになった図書館の中で生徒全員の名札作り、ここからがもう大変であった。彼らの名前がほとんど聞き取れないのである。通訳として来てくれたこの学園の卒業生でさえなかなか聞き取れないのだから、わたしたちにはお手上げだった。それでも、あっているかあっていないかはおいといて、何とか名札を完成させ授業が始まった。授業が始まれば始まったで楽しむ余裕もなく無我夢中で教えた。日本語が出来る子と出来ない子の差が激しく、出来る子には飽きさせないように、出来ない子には授業におくれないようにするにははじめは手一杯だった。前に立って人に何かを教えることもはじめてで本当に無我夢中だった。何回か授業をやっていくうちに少しずつ余裕もでき、生徒たちひとりひとりを見られるようになった。

そこで気づいたのが彼らの私たちを見る目だ。彼らは、まっすぐな瞳で私たちを見ていた。なんの疑いもなくまっすぐに。その瞳は本当にきれいだった。学ぼうとする意欲、私たちを先生として信頼してくれているのが強く伝わってきた。その目を見たとき私は心からこの子達の幸せを願った。



夢を持ってそれに向かって思う存分頑張っ
て欲しい。その瞳でもっとたくさんの世界
を見てほしい。世の中はきれいなことだけ
ではないけれど、見たものすべてがあなた
たちを豊かにしてくれると。そして、その
思いを伝えたくて彼らにキロロの「未来へ」
の2番を教えた。今思うとこの歌は自分
にも伝えなかったものだったのかもしれない。

彼らと過ごした2週間は本当に充実した
日々だった。1日1日を精一杯生きて、ゆっ
たりとしたトキの中で本当の心の豊かさを
教えてもらった気がする。日本であのまま
の生活を続けていたら一生感じることはで
きなかつただろう。なぜ、もっと早くこ
こに来なかったのかと後悔するくらいだ。来
年もかならずまたここに来よう。生徒たち
に会いに来よう。そう強く思い学園を後に
したのであった。

<最後に>

この機会を与えてくれた先生、一緒に旅
を回ってくれた友人、親切にしてくれたカン
ボジアの学生、生徒たち、この旅に行く
ことを許してくれた家族、この旅で出会っ
たすべての人々に感謝します。ありがとう
ございました!! オークントムトム!!



何もないのに、すごく心が満たされていた

文化交流学科 3年 和田 未萌

定員越えのギュウギュウのバスに詰め込
まれ、着いた先は想像以上に綺麗な学校だっ
た。この場所でどんな生活が始まるのか、
全く想像がつかなかったが、私は期待で胸
がいっぱいだった。

いざ生活が始まってみると、日本では体
験したことのないことがたくさん待ってい
た。

水道がない。電気もない。さて、どうや
って生活をするのだろう。しかし、ここでは
それが当たり前なのだ。水道がなければ、
井戸で変わり番こに水を汲み、電気がなけ
れば、ライトを照らし、友達の手をとって
歩く。今考えれば不便な生活だったが、な
ぜかすべてが楽しかった。これが本来の人
間の生き方なのだろうと思った。

「人は一人では生きられないのだからね」
と言う親の言葉が浮かんだ。日本の、物に
囲まれた便利な生活の中では、忘れてしま
いそうなこの言葉の意味を、改めて感じる
ことができた。

朝、日が昇ると目覚め、昼は、大勢の子
供達の笑い声に包まれ、夜、日が沈むとラ
イトを囲み、国も年齢も違う学生がみな
で談笑する。そんな毎日だった。

子供たちは本当に素直だった。知ってい

る日本語で一生懸命話かけてくれた。毎日
毎日、たくさんの花をくれた。覚えにくい
私の名前をノートに書いて覚えてくれた。
「MINAMO」と呼ばれることがとても嬉し
かった。

ある夜のこと。その日は、満点の星空だっ
た。「星が降ってくる」とはこの光景のこと
を言うのだろうと思った。数分に一回のペ
ースで、絵に描いたような流れ星が流れた。
そんな星空を寝そべて見ていると、自分
がとてもちっぽけに思えた。それと同時に、
生きていることが本当に幸せだと感じた。

友好学園で過ごした二週間は、時計の束
縛から解放され、日本にいる時には感じた
ことのない穏やかな時間だった。当たり前
の一日が、とても尊く感じた。何もないのに、
すごく心が満たされていた。それは、自然と、
優しい人々に囲まれていたからだと思う。

カンボジアに私は、優しさで、自分自身
を見つめ直す時間をもらった。本当にこ
のプロジェクトに参加して良かったと思
う。帰る前日、Can you come to Cambodia
again? と寂しそうに生徒に質問された。私
は迷わず Yes と答えた。日本でやるべきこ
とをし、また来年、子供達の笑顔に会うた
めに、カンボジアに帰りたいと思う。





満天の星に鳥肌が立つほど感動した

文化交流学科 3年 橋本 麻美

今回このプログラムに参加することを決めた私の頭の中には、いつも2年前に友人から見せてもらった写真があった。2年前の夏休み明け、このプログラムに参加した友人に見せてもらったたくさんの写真。青すぎる空も、どこまでも続く田園風景も、息を呑むほどの紫の朝焼けも、色黒の子供達の底抜けの笑顔も、それらは日本とはまるで違う異国そのものだった。中でも私の目を引いた生徒達の人懐かしい笑顔。今にも笑い声の聞こえてきそうなその写真を見ながら、懐かしそうに愛しそうに思い出を語る友人を見て、いつか私もこの子達に会ってみたいと思うようになった。だからこそ、写真で見たあの風景に自分が立った時、それがたまたま不思議で、そして何よりもひとつ目標を達成したような気がして無性に嬉しかった。

そして遂に生徒達との対面。教室に入りきらないほどのたくさんの生徒達のいくつもの丸い目がまさに興味津々とばかりに私達を見つめる。現地の大学生に助けられひとりひとり名前を聞くが、耳慣れない名前ばかりで、最初はそれが苗字なのか名前なのかもわからない始末だった。ただ、名前を呼んで名札を渡してあげると恥ずかしそうにこっと笑うのがたまたま可愛くて、この子達がこれから2週間私達の生徒なんだ、と思うと急に気恥ずかしいような照れくさい気持ちになった。

あんなに不安だった初めての授業は、予想通りと言えば予想通りの結果だった。お世辞にも上手に出来たとは言いがたく、つまりは試行錯誤の授業だった訳である。あれだけ話し合いを重ねて来たにも関わらず、相手が人間である限り（ましてや言葉の通じない外国の子供である）絶対には存在しない。授業の流れから時間配分から、全て自分達の考えるようにうまく行かず、毎回授

業が終わった後はメンバーで反省点と改善点を話し合った。それでもそんな私達の拙い授業を一生懸命聞いてくれて、にこにこ笑顔を見せてくれる生徒達にどれだけ助けられたか。学べることの素晴らしさを知っている彼らは、いつも向上心を持ったきらきらした目を私達に向けてくれた。特に思い出深いのが、尻尾を引っ張ると羽が動く仕組みの折鶴を教えた最後の授業である。手先が器用な彼らも流石に悪戦苦闘したようで、クラス全員が同じペースで作ることは容易ではなかったし、何より私達もとても苦労した。それでも、うまく動かないと口を尖らせる子の折鶴を持ち「モイ、ビー、バイ！（いち、に、さん）」の掛け声で羽を動かしてあげたときの、あの生徒の歓声と

嬉しそうな顔を見れば、どんな苦労も吹き飛んでしまうのである。目を輝かせて今どうやったの？と聞かれば、まるで自分が魔法使いにでもなったような気分だった。

生徒がくれた小さな赤い花冠。裸足でやるバレー。授業の後に飲む甘いアイスコーヒー。年季の入ったスクーターでの3人乗り。風の通り抜ける廊下での午後のお昼寝。となりのトトロに出てくるような井戸での洗濯。思わず恐怖で飛び上がるほどの大きな落雷。腕に出来た時計焼け。たまたま現地の大学生の予報を裏切り降り出すスコールは、洗濯物を干している私達をいつも慌てさせた。それでもスコールの後、生徒が「せんせ！せんせ！」と指差した空に、低い半円を描いて掛かっていた大きな虹。鳥肌が立つほど感動した、視界に収まり切らない満天の星空。いつまでも目が離せなかった天の川。全てが今でも胸に焼き付いていて、それらは私の胸をぎゅうっと締め付ける。

カンボジアは日本のように物が溢れている訳ではない。テレビはおろか電気も水道もない生活。それでも私は不便だと思うことはあっても、嫌気がさしたことは一度もなかった。むしろこの2週間は私にとって何よりも贅沢な時間だった。帰りたと思える場所があること、また会いたいと思える人がいるということ。それは、これからの私の原動力となりそうである。

大切な人たちととてもいい時間を共有できた

文化交流学科 3年 梶山 真矢

2年前、まだ入学して間もない頃に、このプログラム経験者の先輩に「一回行ってみたほうがいい」と言われただけで、詳しい話も聞かずにこのプログラムに参加することを決めた。どうせ聞いてもわからないし、現地のことも実際よく知らないし、なんとなく楽しそうだから、と軽く構えて参加したことをキッカケに、私はカンボジアの虜になった。

去年もこのプログラムはあったが、自分の中で2年前の経験が重すぎて、軽い気持ちで参加することが出来なくなっていた。しかし、心の準備もできた今年、プログラムの始まる半年以上も前から行くことを決め、出発の2日前からはまともに寝られないほど気持ちは高ぶっていた。

前回と大きく異なる点は学生の数だった。

私が参加した一昨年、学生は7名だったのに対し、今年はその約3倍の19名であった。そして参加メンバーには、私と同じ、リピーターが約半分を占めていた。

カンボジアに行ってみたく思っている人は意外とたくさんいるが、行くまでに踏み込めなかった人が一番気にしていることは、きっと現地の学校での生活だろう。実際、



一回経験している私でも日本にいるときにカンボジアでの生活のことを考えると、気が重くなった。しかし不思議なことで、水といえば井戸に頼り、蚊帳を張って蚊取り線香をフルに活用し、夜はライト無しでは外に出られない、という超不自然な生活も、現地だと自然に思えるのだ。「2週間は長い…」と口にしてきた全員が、最後には帰りたくない気持ちにさせられてしまうほどのゆったりとした開放感。そこでしか味わえない贅沢と私には思えて仕方ない。

今回参加した一番の理由。それは2年前の生徒たちにもう一度会うこと。まず会えるか、元気であるか、もしかして何かの都合で学校に通えなくなってしまっていないか。たくさんの不安を抱えながらここへ来た。しかしその不安も飛んでいってしまう笑顔がここにはあった。背が伸びていたり、声が低くなっていたり、英語がペラペラになっていたり、2年前より確実に成長している姿が伺えた。成長した日本語で、2年前の思い出話や仲間のこと、勉強のこと



を色々話した。もちろん通じないことのほうが多い。でも嬉しくて、お互い必死に会話をした。またこの子たちのことを日本でただ想って胸が痛くなる日々が絶対来るから、2週間の間は出来るだけ子供たちと時間を過ごした。

何も変わっていないことが嬉しくて毎日過ごしていたが、2年前によく行っていた喫茶店のおじいさんが亡くなっていた。また会って記念写真を撮りたかったのに、あの笑顔はもうそこにはなかった。時は確実に流れているのだと実感した。ここで今楽しく一緒に過ごしている子たちも、いつ会えなくなるかわからない。そう思うとすべてが愛おしく感じられた。

「なんでカンボジアなんて行くの？もっと先進国に行けば？」

私がこのプログラムに参加してから言われ続けていることだ。確かに、先進国はきれいだし生活に不便はないだろう。しかし行ってもいないのに、カンボジアと聞いただけで「良くない国」と決め付けるのはおかしいだろう。どんな先進国や発展途上国だって、実際に行ってみないと何も見えてこない。本当の良さはわからない。

せっかく大学に入って、夏休みはとても長くて、こんないい環境が整っているのだから、是非たくさんの人にこういう経験を

して欲しいと思う。今年は私の友達もこれにたくさん参加した。というより何人かには猛アピールをして誘い、一緒に旅をした。日本でただ遊んでいるなら、見て欲しいもの、触れて欲しいもの、出会うって欲しいものがたくさんあった。特に大切と思う人ほどそれを感じて欲しかったし、一緒に感じたかった。もちろんこの旅がキッカケで仲良くなった人も、今ではとても大切な人となった。そしてカンボジアにはそれに必要な魅力がたくさんある。大切な人たちととてもいい時間を共有できたこと、そしてその時間について、これからも語り合ったり考えたりしていけることは、私の人生の中でとても大きな財産だ。

子供たちと別れる時は、2年前と同様、とても悲しかった。しかし、2年前よりも悲しくなかったのは、また絶対会える、という確信があるからだと思っている。2年前はもう会えないかも知れない、と思ったら悲しくて仕方なかったが、やっぱりまだまだ彼らの成長を見続けたい、と思った私はすんなり前を向くことが出来た。会いたいなら会いにすればいい。その時のために私も成長しなくては。私は、彼らの将来が楽しみで仕方がない。自分の気持ちや想いが、さらに明確になった旅となった。

だいぶ変わっていたカンボジア

現代英語学科 4年 大貫 貴子

2度目のカンボジア。実は今回プログラムに参加するか、直前まで迷っていました。お金のこと、将来のこと、いろいろな問題があってなかなか決断出来ませんでした。それ以上に私のカンボジアへの思いは強かったらしく、友人を誘い3人分の飛行機のチケットを予約して、今年の夏もカンボジアで過ごしていました。

1年ぶりのカンボジアは前に来た時とは、だいぶ変わっていました。プノンペンでは、道路を走る車の量があきらかに増えていたり、信号ができていたり。村でも去年はあまり見られなかった電気を通すための電柱のようなものがあちらこちらに立っていて、カンボジアという国のパワーと成長を感じました。友好学園があるリング村も電気が通るようになったら、きっとどんどん栄えてくるでしょう。しかし、そうなった時、のみこまれそうになるくらい大きく広がる

星空や、のんびり流れる時間、外で土まみれになって遊ぶ子供たちの姿もどんどん見られなくなっていってしまうのかなと思うと、少し寂しさを感じてしまったのも事実です。でもそれが、とても自分勝手なエゴだということも分かっています。この村は、この人たちは変わらないでいてほしい。当然、電気があったほうが人々の生活は便利になるし、生活が豊かになったほうが子供たちの可能性だって広がるのに、“変わらないでいてほしい”そんな風に思ってしまう自分はやはり豊かな環境のなかで暮らす日本人で、なんて自分勝手なのだろうと感じました。

8月24日。前日にグループのメンバーと合流し、カンボジアの首都プノンペンからリング村に向かいました。翌日から5時に起きて7時から授業開始という生活が始まりました。初日の授業は、自分でも情けな

いくらいあたふたしてしまい、時間配分ができない、授業の進め方が下手、内容が生徒のレベルにあっていない、など反省点ばかりあがってしまうものでした。でも、グループのメンバーと毎日話し合い、工夫を重ねる度に、反省点は減り、自分達自身にも授業を楽しむ余裕が生まれてきました。

私たちのグループは2週目の最後の授業でキロロの“未来へ”を教えました。初めて聞く歌、初めて感じるリズム、生徒達にとってはとても難しかったと思います。でも、リズムがグダグダになりながらも必死に私達と一緒に歌ってくれる子、とりあえず大きな声でなんとなく歌う子。みんなの一生懸命さが伝わって、私達も声がかかるくらい何度も何度も歌いました。そんな思いもあり、お別れ会でみんなと一緒に“未来へ”を歌った時は“嬉しい”とか“感動した”という言葉だけでは表現出来ないような感情がこみ上げ、この子たちとの出会いや、思い出をずっと大切にしたいと思いました。

友好学園の生徒との出会い、カンボジアの大学生との再会、その一つ一つの出会いが私の人生の財産であり、宝物です。

友好学園での生活は本当にあつという間でした。通訳として授業を手伝ってくれた学生たちとどうでもいいような笑話や、真剣な話をしたこと、放課後に遊びに来てくれた生徒達と泥だらけになりながらバレーボールをしたこと、見たことのないようなきれいな空をずっと眺めていたこと。カンボジアでなければ見られないもの、出来ないこと、感じられないこと、たくさんこのことを今年も目いっぱい吸収できたと思います。

今年も去年と同じことを言うてしまうけれど、私はきっとまたあの空が見たくなって、そしてまた彼らに会いたくなって、ふらっとあの地を訪れてしまうような気がしています。

カンボジアとは私にとってそういう場所です。



もう友好学園にはこられないだろう

現代英語学科 4年 永井 広美

今年が2回目のカンボジア。去年は、何も知らないまま友達と一緒に話を聞きに行き、なんとなく行くことを決めた。今年、行くことを決めたのには2つ理由がある。1つ目は、カンボジアの大学生、子供達に会いたかったから。2つ目は、今年が学生最後の夏休みで、1か月という長い期間どこかへ行ける最後のチャンスだと思ったから。運よく出発前に仕事も決まり、ホッとした気持ちで出発をむかえられた。

今年、アジバザのタイの買い出し担当で、バンコクで買い出しなどを楽しんで、順調なスタートかに思われたが、国境で思わぬ事態が起こった。先にバス乗り場にいったはずの友達2人が、私ともう1人の友達がそこに着いた時、姿がなかったのだ。連絡が取れずに焦り、チケットを持ってなかったために余計なお金を払わなくてはならず、その時は最悪の気分だった。

今年、人数も多くて、去年とは雰囲気も違う感じがしたけど、それなりに楽しかった。やっぱり、毎朝5時起きはつらく、夜の水浴びは冷たく、少し寒かった。

今年、英語を教えた。私が思っていたよりもカンボジアの子供達は英語ができた。普通に会話ができる子もいて驚いた。授業をするのは、ちょっと緊張したけど、やっぱり楽しかった。積極的に発表してくれる子供が多く、授業はわりと進めやすかった。同じ内容を何度もやっていくうちに、だんだん良くなっているのを自分自身でも感じられた。Harrisと一緒に授業をできたのも、私にとって大きかった。彼は actor だ。子供の惹きつけ方、発音の教え方、会話のモデル、何をとってもすごいと思うことばかりだった。

午後は、お昼寝とバレーボールをするのが大好きだった。今年、校庭にバレーコートができていて、友好学園の生徒に混ざってバレーボールを楽しんだ。今年はいレ

ベルだった。ただ、ネットが高かった。

授業が後半に入ってから、時間が過ぎるのがとても速く感じた。今年が最後なんだあ、あと少しで終わってしまうんだあと思うと、だんだん寂しさが込み上げてきた。

友好学園を離れる前、子供達が「来年も来てね。また会おう」とクメール語で言っているのをなんとなく理解できた。通じたかはわからないが「来年は来られないの」と日本語で答えるのがとても残念だった。

カンボジアの大学生と過ごした多くの時間も私にとっては大きかった。一緒に話をする中で、日本とカンボジア、お互いのことを知ることができた。カンボジアの大学生は、カンボジアの歴史や文化など自分の国のことをよく知っていることに感心した。自分の国のことを知っているということは大切なことだし、見習わなければならないと思った。

今回、内容的には、すごく満足しているし、本当に楽しかった。しかし、授業を人にまかせてばかりいたグータラな自分やE科ながら”R”と”L”の発音の違いがわからない自分がかかりした。自分を見直すいいキッカケになるかもしれない。

私達のこの活動が、子供達にとって何かを得られるもの、将来へと繋がっていくものであるならうれしい。

来年からは仕事をしなくてはならない。たぶん友好学園に行くのは、今年が最後だろう。でも、またいつか絶対にカンボジアを訪れたい。この先、ずっとカンボジアと関わりを持ち続けていきたいし、いつか友好学園で教えた子供達と話をしてみたい。

カンボジアの大学生、そしてリピーターの子供達との再会、新しい子供達との出会い、豊かな自然、心の温かい人々、本当にカンボジアに行くことができてよかったし、感謝している。

懐かしい気持ちで、校舎を歩き回った

文化交流学科 3年 坂本 亜希子

私はこの企画は2回目の参加でした。1回目参加したのは2年前の大学1年生の夏で、カンボジアに対して無知識だったので、目にするもの生活するもの全てにカルチャーショックを受けていました。そして、2年前は先輩方について行くことで精一杯で自分たちがどうやってプレイベンまで行ったのかも分かっていませんでした。

学校での生活は暑いし、水もがぶ飲みしたいのに一回沸かすようだし、蚊が多いし、蟻に食料は食べられるし、精神的に弱ってしまうことも多々ありました。

それを元気にさせてくれたのは友好学園の生徒達で、体に対して大きすぎるだろうというような自転車で授業が始まる1時間前ぐらいに登校している勉強熱心な姿を見てやる気にさせてもらっていました。授業の方も4年生だったリピーターの先輩と組ませてもらって、笑いに真面目にメリハリがあった授業が出来ました。その先輩の姿を見て、『またここに来る機会があったら、先輩の授業を受け継いで教えたい』という目標が出来ました。ただ、航空券の取り方、空港の手順、目的地までのチケットの買い方など分からなかった私は自分たちの力で行けることはないだろうなど半分あきらめていました。

2年生の春休み、斎藤先生の文化交流体験という授業で1年半ぶりに2週間カンボ



ジアに行きました。何気に場所を覚えていたのもあり、もしかしたら夏にこの企画に参加出来るかもと思い、参加しました。

友好学園に着いた時はなんとも懐かしい気持ちでいっぱいになり、校舎を歩き回りました。2年前と変わっていたことはラクダさんが校舎をたてていたことと、クロ(犬)の他にシロが増えていたことぐらいであとは全然変わっていませんでした。

市場も場所も変わってないし、豚や牛がたくさんいるし、子どもが元気に手を振ってくる姿も変わっていませんでした。一言、『ただいま』と感じました。

授業は、一緒に教えるグループと相談して2年前と同じことを中心にちょっと変えながら教えていきました。これで目標を達成しました。

授業初日、私は楽しみと同じくらいに不安もありました。みんなにはこんな感じでね、これをやったらすごい盛り上がったんだ!!と大げさなぐらいに話していたので、その通りにならなかったら、勉強が楽しいと思える授業が出来なかったらどうしよう不安もありました。最初の授業そのものは、生徒の反応が積極的ではありませんでした。全体的にシャイな子が多いと後から分かったのですが、最初はグループみんなて必死に授業の流れを考え、イメージトレーニングをしていました。生徒一人一人と接する時間が増えてきてからは授業の少し堅かった空気がやわらかくなり始め、スムーズに進めることが出来ました。

最後の授業の時に、時間が余ってしまった場合、生徒に授業の感想を言ってもらっていました。『授業はどうでしたかー?』と聞くと『サバーイ(楽しい)!!』と大きな声と満面の笑顔で答えが返ってきました。それが本当に嬉しかったです。来て良かったと思いました。

別れの時はまた2年前とは違う悲しさがありました。他のグループがkiroroの『未来へ』を各教室で教えていました。最後にみんなで歌ったのですが、言葉が通じない中で本当にみんなが一つになったと思った瞬間でした。帰って来てよく『未来へ』を聴きますが、聴くたびに友好学園を思い出しています。また、今年は人数が多かったので楽しかったです。このメンバーで行くのは初めて最後でしたが、本当にいい思い出になりました。



I Love Cambodia

東海大学健康科学部看護学科 3年 金澤 悠

今回、茨城キリスト教大学(以下IC)の団体に混じらせて頂き活動したことで、一昨年のように日本人独りという寂しさを感じることもなく、カンボジア学生の通訳もいて言葉の壁も薄く、授業を行ったり、お別れ会を開いたり、同じ看護の優ちゃんと病院の見学に行ったり、[友好学園出身の大学生]チビットやソムナンからカンボジアの病気について話を聞いたり、独りではうまく出来なかったことなどが一昨年より実行出来た達成感があります。そして、ICの学生や先生方が部外者の私を暖かく受け入れてくれた事が、本当に嬉しかったです。更に、カンボジア学生のいろんな意味での

たくましさ(蜂の巣を素手で採取したり、家族の為に努力し続ける意志の強さなど)や、優しさを感じる事が出来て素敵な体験ばかりの旅でした。

メインイベントである授業は思っていた以上に大変でしたが、とても貴重な体験ができました。今まで多人数に教えた経験は無く、初めての国で言葉も文化も違う中、母国語ではない英語を教えるということはとてもプレッシャーでした。発音は大丈夫かな?ちゃんと理解してくれるかな?授業が暇で遊びだす子がいたらどうしよう。英語が全くわからない子ばかりだったらどうしようなどなど、直前になってすごく不安

でした。しかし、授業を初めてみると、そのような不安は一気になくなりました。生徒達は、皆すごくニコニコと楽しそうに、目を輝かせて授業を受けていて、元気一杯。本当に可愛い子達ばかりでした。クラスによって理解度やムードが異なるので、クラスに合わせて少し授業内容を変えたり、歌やゲームをどのように行うかで頭を悩ませたり、50分という決められた時間内で授業を行うため授業内容の練り直しをすることは一苦勞でした。けれど、それもまた楽しかった素敵な思い出の一つです。同じクラスのマヤやパットにたくさん助けてもらいながら、試行錯誤して行った授業が上手くいった時の手応えと感動は、一生忘れないと思います。

更に、カンボジアと日本の違いを肌で感じたことで、学んだことがあります。蛇口を捻れば簡単にきれいな水が手に入り、お風呂やトイレは水汲みなんかしなくてもいつでも好きな時に入れて、トイレトーパーは当たり前のようにトイレにあり、ごみはゴミ収集車に預けるだけでよくて、スイッチ一つで洗濯ができる機械がある（しかも仕上がりは良い香りでフワフワ）、フカフカのベッドで虫に侵される心配をせずにぐっすり眠れて、当たり前のように学生生活を送れていること、などなど多くの違いがありました。この時、自分がどんなに恵まれていて幸せであるかを改めて実感しました。だから、カンボジアの皆を見習って学習すること、自分の生まれ育った環境が恵まれていることを忘れずに、文句を言わず何事も可能な限り努力をしていくように心掛けていこうと思います。同じアジアにあるカンボジアという国に訪れたことで、今の自分の生活や考え方を思い返すきっかけとなり、精一杯なカンボジア人に会ったことで、自分の励みにもなりました。

加えて、自分が実際にカンボジアで体験したことを周りの人達に伝えていこうと思っています。私の周りの人々は、カンボジアは貧しくて汚い国と思っている人が多いです。確かに、まだまだ貧しいです。けれど、みんな毎日生きていく中で大切なことを一つ一つこなしていく重要さや、どれが大切なことか忘れないように生きています。家計を助けるために働きながら頑張っている学生の鏡の様な子供達もいます。外見的には貧しくても人としての内面性は、日本人よりも豊かな人達ばかりであることを伝えていきたいです。もし、

人を表面的なものだけでなく内面的な豊かさで計算したら、日本とカンボジアどちらが豊かなのだろうか？ この問いに対しての答えを探りながら、もっともっと周りの人々にカンボジアのことを知ってもらえるような話をしていけたらいいと思います。

今後も、このような活動に参加させて頂き同じアジアの国として、見習うべきところは見習っていき、自分が役立てることを見つけていながら、より良い関係を築い

ていきたいです。更に、このような活動に参加できる機会が再度ある時は、もっとその国の文化と現地語を学習して取り組みたいです。

最後になりましたが、藤田先生をはじめICの先生方、花江や向君、ICの学生のみんな、本当にありがとうございました。世界には様々な国があるけれど、私はまたカンボジアを訪れてみたいと思います。I Love Cambodia ☆

ウキウキしながら生きよう

東慶應義塾大学 3年 向 恒生

相も変わらず向こうの生活は不便だった。井戸は一年前から使い勝手が何も変わっちゃいないし、壊れやすくなった気すらする。水洗トイレとは名ばかりで、結局はバケツに汲んでおいた水で流す、というかそれでもあまり流れない。充電したバッテリーを使う蛍光灯が一番有り難みを感じているのは小さな虫達のように、夜になれば蚊に追われ、蚊帳に入れば蚤に噛まれる。火がしっかり通っていない細長い米を食べ、暑い中熱いお茶を飲む。

ああ、お風呂に浸かってシャワーを浴びて、キンキンのビールを一杯やって、クーラーが程よく利いた部屋でふかふかのベッドに沈み込みたい…。明日は何時に起きようかな。目が覚めるまで寝てりゃ良いか。昼過ぎには起きれるだろうから、駅前にラーメンでも食べに行こうか。

と、こういう気持ちは二回目になっても無くならないということに自分で驚いた。分かっていたはずの、ここの生活の色々な面での煩わしさ。去年それに慣れたところで帰ったものの、一年経つとやっぱり不便は不便だった。

そういう生活に不慣れな私達日本人が皆で上手くやっていくためには、何かを進んでやる主体性が問われ、生活を良くするた

めに工夫したり新しくルールを創り出す発想が必要であり、そしてそれらを守っていく協調性が問われる。

学園で生活していると、そういったある種の「人間力」みたいなものが、知らず知らずのうちに身に付いてくる。…なんてことはまるでなくて、「ああそういうのって必要だよな」と感じるチャンスが多いくらいで、変わるのかどうかはそこからの自分次第。

皆で協力して一つの感動に辿り着いた。新しい友人が増えた。生徒が心を開いてくれた。綺麗事だけではなく、トラブルを抱えることも重要な要素の一つであるし、とにかく整腸剤、じゃない成長剤があちこちに転がっている。

社会に生きる上でとても大切なことが、こういう大自然の中で実感できるというのはとても不思議な感覚で、未来に胸が踊るような気持ちになったり、今の自分に危機感を覚えたりする。生きる実感、とは在り来りな言葉だが、実体を捉えるのは難しい。でもそれを掴む手掛かり足掛かりを見つけて出来るのが、このボランティアの魅力なんだと思っている。

カンボジアの暮らしと、日本の暮らし。似てないような、似ているような。



たくさん元気をもらった3度目の友好学園

青山学院大学国際政治学科 3年 藤田 花江

私は一昨年、去年、今年と3年続けての参加でした。友好学園に続けて行って何より面白かったのは、子供たちの大きくなった姿を見れたことです。一昨年の夏、去年の夏の授業に来てくれた生徒の多くにも会うことができました。リピーターとして毎日授業に来る子も、たまに授業に顔を出す子も、授業の終わった午後に遊びに来る子も、買い物に出かけた市場で声をかけてくれる子もいました。大きくなっているだろうなあとは思っていたけれど、見た目の成長も中身の成長も想像以上でした。

去年は可愛いレースのついた白いブラウスを着ていてひたすらアルプス一万尺をして遊んだクンティが、背が伸びて制服を着て英語で話しかけてきてくれました。それでも男の子とケンカしてやりあっている姿は相変わらずで可笑しかったです。

一昨年は私の持っていた懐中電灯が欲しくて駄々をこねていたラスメイは、背がぐんと伸びて話し方も大人びて可愛らしい印象とは大分変わっていました。授業中そばに立っていると「どうぞこちらへ」という感じにちょっと席を指差して座る場所をつ

くってくれました。

ここ4年、毎夏このプログラムの授業に来ていたというピサットも背が伸びてかなり印象が変わりました。日本語も英語も達者になっていて、今まで謎だった彼の学年と年齢など詳しく聞くことができました。言葉でのコミュニケーションが去年よりまたずっととれるようになってうれしかったです。次に会うときにはクメール語の勉強をして驚かせたいなあ。彼らと2回、3回と会えたことでいつでも会えるんだという余裕がお互いにできたと思います。それはすごくうれしいことでこの関係は大切にしたいと思います。私も大人になって、彼らが今の私くらいの年になった頃にまたゆっくり話ができればそれも面白いだろうなあと思いました。想像はできないけれど、楽しみです。



今年初めて会った子どもたちも思いつきり慕ってくれて可愛かったです。休み時間に日陰で休んでいると「か・わ・い・い・ヒ・ロ・ミ」なんて言いながら頭にお花をつけてくれました。覚えての「かわいい」を使ってくれたのだけど、名前が少し違いました。何も言わないで果物やお菓子を差し出さずこうやって食べるんだよって見せてくれる子もいました。楽しいみんなにたくさん元気をもらった2週間でした。



自分でもこんなのガラじゃないと思っていた

文化交流学科 3年 平根 拓也

今回、私がこのカンボジアボランティアの参加を決意したとき、みんなに驚かれたのを今でも覚えている。友人にはもちろん、親も、そして先生でさえ驚いていた。正直自分でもこんなのガラじゃないと思っていた。

もともとこのプログラムについてはあまり関心がなく、私には関係ないことだと思っていたが、今回参加するという友人達に誘われて少し考えるようになった。だが、2週間という日数や金銭的な面の問題でなかなか参加を決められず、そんなとき友人にこんなことを言われた。

「おまえは文化交流学科なのに大学に入ってから今まで何か文化交流してきた？」

この一言が決めてだった。

そしてカンボジアでの生活が始まる。今回このボランティアで私は日本語の教師という立場できた。もちろん私にはそんな経験はないため、期待や楽しみというよりも「自分にちゃんと授業ができるのだろうか」という不安感の方が勝っていたと思う。

そんな気持ちで迎えた最初の授業は悲惨なものだった。自分のことで精一杯だった私は子供達がちゃんと理解しているかなどあまり意識しないで自分のペースで授業を進めてしまう。

以前このプログラムに参加していた友人は、「授業中、子供達に質問するとみんな手を挙げてくれるから盛り上がりやすいよ」といっていたので、授業の雰囲気を変えようと私も実行してみることに。

「誰かこの問題わかる人〜？♪」

「……………」

「……………」

「……………」

(誰も手挙げないじゃん!!!)

とても焦った私だったが、よくよく考えれば当たり前のことである。子供達のことを考えず、自分のペースで授業を進めてしまっていたのだから。

このことを反省し、次の授業はやり方を変更することに。といっても変更した点は

少しで、一つのチャプターを終えるごとに子供達一人一人にちゃんと理解できたかを確認していく、ただそれだけのことである。

だがこれが大成功だった。一人一人確認していくので、それぞれが自分の答えに自信を持つようになり、それが手を挙げてくれることにつながる。そんな授業は雰囲気もよく私も楽しめた。やり方を少し変えただけでここまで雰囲気が変わることに驚きと楽しみを覚え、そしてまた授業の組み立て方の難しさというのも知った。

今回は日本語を教えるという立場で行ったが、実際私が教えたことよりも、教わったことの方が遥かに多かった。それはもちろん授業で感じたこと、普段とは異なる生活環境、言語、考え方など様々である。

それだけで今回の私の旅は大成功だったといえるだろう。

本当の豊かさは物質的なものではない

食物健康科学科 4年 塚田 信

私は、2週間のカンボジア日本友好学園でのボランティアを通して、子供達から人を思いやり互いに助け合うこと、素直さなど私たちが忘れかけているものを学ぶことができた。また、カンボジアの子供はとても愛されていることに気付かされた。

カンボジアのボランティアでは、日本の歌、野菜や果物などの単語、次に食べ物の種類を使って日本語を教えた。日本の歌では、最初は子供達は戸惑っていたが、私たちの熱意が伝わったのか、少しずつ一緒に歌ってくれるようになった。また、最初どう教えたらよいか分からず戸惑ってしまっていたが、クラスで一緒だった任利先生がまず、自ら教え方の見本を見せてくれて徐々に私たちも子供達に日本語を教えることができるようになった。

私も、子供達に日本語を形だけ教えるのではなく、子供達が日本語を自ら学べるように心がけた。最初、子供達は黒板の文字をノートに写さなかったが、徐々に黒板の文字をノートに写すようになった。日本語を理解し、日本語に興味を持ってくれたのだと思う。また、ノートに先生の名前を書く子供もいて、私たちも子供達に近づけたのだと感じた。最初は教え方が分からなかったが、次第に子供達と一緒に学ぶということができてきた。子供達とコミュニケーションが取れるようになって、一方向だった授業も子供達と共に進むという双方向に代わっていった。

また、日本の食べ物を使って日本語を教えた。寿司やサラダは知っている子供が多かった。寿司やサラダは好きですか？と聞いたところ最初は嫌いと答える子供が多

かったが、徐々に好きと答える子供が多くなった。日本の寿司やサラダに関心を持ってくれたのだと思う。子供が寿司はプノンペンの都市で食べられるよと教えてくれた。また、都市部でのレストランでサラダを食べる機会があった。そのとき、子供達は都市の食べ物にあこがれているんだと思った。そして、私たちは、チャンスに恵まれていると感じた。カンボジアの子供の進学は奨学金での進学が多かった。みんなチャンスをつかむために一生懸命だった。

私たちはチャンスには恵まれているがそれを活かさない、カンボジアの子供はチャンスを活かすことはできるがチャンスが少ないように感じた。また、チャンスが少ないとみんな競争しようとするがカンボジアの子供はそのようには感じず互いに助け合いながら勉強をしていた。

最後に知りたい日本語を子供達に書いてもらった。最初は書くのに戸惑っていたが徐々に子供達が自ら書くようになった。みんな日本語に対する興味、自分の家族、自分の国に対して興味が見られて、子供達は自分の愛しているものに興味があった。子供達を見ていて本当の豊かさは物質的なものではないと感じさせられた。

私たちはチャンスに恵まれている。このチャンスは自分のためだけにあるのではなく人のためにあるのだと考えさせられた。これから、子供達にも、進学のチャンスが与えられるように、海外へ行くチャンスが与えられるように祈っていきたい。そして、子供達に愛され、今度は、私もさらに子供達のためにもっとできることを考えていきたいと思う。



この子供たちも私と同じ時間を生きている

文化交流学科 2年 鈴木 麻由

昨年初めてこのプログラムに参加して以来私はすっかりカンボジアに魅せられた。何をしても心のどこかにまた行きたい、また友好学園の生徒たちや現地の大学生たちに会いたいという思いがあった。そして今年、ようやく夏が来た。意気揚々と出発し、国境でぼられて人口爆発気味のタクシーに乗りカンボジア入り。「まったく…それでも行きたいんだから、また会いたいんだから仕方ないね」と顔を見合わせ友達と笑い合った。ゆっくり日が暮れ、高床式の家々に灯るテレビの光がよく見えた。いつのまにか泥だらけの窓ガラスの向こうは満点の星空に…ここに來られて本当によかった。

友好学園に着くとさっそく、昨年仲良くなった子供たちと再会できた。見覚えのある顔はみな、少しずつ大人になっていた。よく手遊びをして遊んだ子供がはにかみながら私の名前を呼んでくれた。その瞬間、「この子供たちも私と同じ時間を生きている」という当たり前のことを強く感じた。昨年このプログラムに参加する以前は、カンボジアは私にとって果てしなく遠いどこか別の世界だと思っていた。そのカンボジアの子供が私のことを覚えてくれている。世界は確かに繋がっているという事実が目の前にあった。

いざ授業が始まると日々の暮らしはあっという間だった。ノートに一文字書く度に私を呼び止め「うまく書けているでしょ？」



と自信ありげに笑う子、休み時間に覚えたての日本語を使って楽しそうに話しかけてくれる子、どの子もみんなキラキラした目で私たちの決してうまくはない授業を聞いてくれた。カンボジア人の、特に友好学園で出会う子供たちの目はほんとうにきれいだ。純真でたくましい、表情豊かな目。日本に帰ってから夜電車に乗っていると、ショックを受けた。誰もが疲れた目をしていて、表情が無い。

確かにカンボジアは日本より貧しいし、社会は暗い現実をたくさん抱えている。しかし、人々の表情に関してはカンボジアのほうが豊かなのではないかとふと感じた。子供たちの目は未来への希望に満ちて、新しいことをなんでも吸収したいという素直な熱意に溢れている。日本でこんなに環境の整った中で勉強をしているのに、忘れがちな学びたいという素直な気持ち。

またあの笑顔に会いたい

現代英語学科 4年 鈴木 恵理華

昨年このプログラムにはじめて参加した。アジアへの旅、電気なし水道なしの生活、何十人の生徒に日本語を教えることなど、はじめてのことだらけだった。苦労したこともあったが、すべてがよい体験だった。なにより、通訳してくれて仲良くなった大学生たちや友好学園の生徒たちなど、カンボジアで出会った人たちがみんな優しい人だったので、また会いたかった。特に、友好学園の授業で得るものは、普通の旅行ではできない、このプログラムに参加しないと得られないものだ。

今年、友好学園に着いてすぐに「エリカ」という声が聞こえた。名前を呼ばれたほうを向くと、去年教えた生徒たちの姿が見えた。きっと私のことなんて覚えてないだろうなと思っていたので、名前を呼ばれた時は、嬉しかった。変かもしれないが、『帰ってきたんだなあ』と実感した。

私たちのグループは授業で日本語だけでなく、踊りを取り入れることにした。お祭りやよさこいソーラン節で踊られるような



今回も、日本語を教えに来て逆にたくさんの子供たちから教わった。子供たちが大人になってもあのきれいな目を持ち続けていてほしいと心から思った。

この経験は私にとってとても大きな財産だ。日本にはなかなかできない経験に溢れた一か月の旅、他のどんな過ごし方よりも充実した夏休み。ここでしかできないたくさんの経験。そんなすてきな夏休みを過ごせたことを心から感謝し、うれしく思っている。

日本の踊りだ。カンボジアの学校の授業で体育や美術はない。男の子は走り回っているが、女の子などは基本的におとなしい子供が多い。難しいかと考えたが、去年の生徒たちが授業に意欲的で素直だったので、子どもなら体を動かせば簡単に覚えられると思った。

しかし、初日の授業で、一番初めに担当したクラスでは40人中5人ほどしか一緒に練習してくれず、列に並ぶこともせず、みんな木陰へ逃げた。去年、難しい日本語の問題でも声をかければ答えたのに、並ばず逃げたのは予想外だった。少しショックだったが、逆に絶対踊らせようと気合が入った。毎時間踊りの練習は続け、少しずつ興味を持ってくれるようになった。膝を曲げ、足を広げ、腰を入れるような踊りなので特に女の子は恥ずかしかったが、みんな練習に参加するようになった。授業とは関係ない時に、教えて欲しいと来る生徒も出てきた。しかし、踊りは当初考えていた所まではいかず、生徒全員が完璧には踊れなかつ

た。事前にもっと準備や、教え方を考えておけば、もっとスムーズにいったのかも知れない。ほとんどの生徒が同じ所につまづいていたが、私も余裕がなく、上手に教えてあげられなかった。それでも、生徒たちはわからないながらも、見よう見まねで動き、一緒に踊ってくれた。私は、彼らとの日本語や踊りの授業、授業が終わった後に遊んだこと、とにかく彼らとの時間は楽しかった。これで彼らも楽しんでくれて、異文化への興味など、何かのきっかけにちょっとでもなってくれていたら嬉しい。

最後のお別れ会で、全クラスの生徒約240人で踊った。私たちのグループは、見本として生徒たちの前で踊った。踊りの最後、240人の生徒と向かい合い、手を合わせお辞儀をする「オークン(ありがとう)」のポーズを全員でした。顔を上げて、生徒の笑顔を見たとき、本当に感動した。初めは5人しか練習しなかったのに、二週間で240人と笑って一つのことができたなんて、夢のようだった。あの光景は一生忘れない。

2回目のカンボジア。アンコール・ワット。青空。ヤシの木。星空。地平線。田んぼ。トゥクトゥク。朝日。トゥッケイ。風。カンボジアには私を惹きつけるものがたくさんある。いくらでもある。でも、その中でも一番がわかった。『人』だ。首都のプノンペンで車が増えて、交差点に信号がついていた。発展していると感じた。その一方で、国境付近で怖い目にあったり、物乞いする子供たちを見て、やはりまだ危険さや貧困さを感じた。そんな中でも、カンボジアの人たちは、優しく、明るく、暖かく、そして人懐っこい笑顔だ。あの笑顔の彼らがいるから、カンボジアが恋しくなる。またあの笑顔に会いたい。そして次に彼らにまた会うときまでに、私もあんな笑顔に少しでも近づいていたい。



カンボジアで見たこと 考えたこと

現代英語学科 4年 本多 亜依

友好学園に向かう車の中で私はずっと外を見ていた。どこまでも続いている透き通った空一面がとても印象に残っている。目を下にやると、ヤシの木や田んぼがきれいに並んでいて、子供が水牛にまたがって田んぼを耕したり、家の周りで遊んでいたりと、それはまさに平和を象徴するかのような、日本では決して見る事ができない景色。カンボジアの天気は不安定で、昼はとても日差しが強いのに夕方になると急にスコールがやってきて雷が鳴りものすごい量の雨が短時間の内に降る。雨が降ったと思ったらまた太陽がでてきて、地面を太陽が照らしあつというまに乾かす。

今まで雨なんて大嫌いだった。髪はしっとりするし、何よりコンクリートにしみ込んだあの独特なおいが好きじゃなかった。自然にとって大切なんて考えたこともな

かったけど、雨は自然の恵みなんだと思うとなんだか雨が好きになった。夜になると空一面に星が宝石箱のように散りばめられどこを見てもキラキラしていた。あの光景は一生忘れないと思う。まさにカンボジアは自然の恵みと共に生きている国だった。

カンボジアの村では日本では当たり前だと思っていたもの全てが覆された。水道、道路、食べ物、電気、日本ではあって当たり前のものでそこにはなかった。カンボジアにいる時、そのありがたみを感じたけれど日本に帰ってきた時のほうがもっとありがたみを感じることができたし、ある意味とまどいさえ感じてしまった。蛇口をひね



れば水がでるし、シャワーだって使いたいだけ使えるし、電車だってこんなに発達しているし、スイッチを押せば電気はつくし、食べたいものを選んで買って好きなだけ食べることができる。今まで生活の上で不便だなんてほとんど思ったことがなかった。むしろたまにもっとこうだったらいいのにな、と思うこともある。選択の自由があればあるほど人はどんどん貪欲になってほんの小さなありがたみや大切さを忘れていくんだなと思った。カンボジアはそれを教えてくれた。

また、カンボジアは貧富の差がとても激しい国だった。大きい車に乗って食べ物も何の不自由なく暮らしていける人もいれば、物乞いをして毎日生きるか死ぬかの日々を送ってる人もいた。世の中はとても不公平だなと思ったが、彼らの生活の中にも笑顔があった。それなりに楽しいこともあったり、悲しいこともあったり、私たちがみてかわいそうだなって思うことも彼らにとってはそれが普通だったり、そんな彼らの笑顔を見てとても胸を打たれてしまった。

友好学園の子供たちは笑顔で満ちあふれていた。本当によく笑っていた。そして学びたい意欲でいっぱいだった。一つでも多くのことを学ぼうとする彼らの姿勢は何か私に大きいのしかかるものがあった。私は今こんなに勉強ができる環境の中にいるのに何をやっているんだろう。目の前にいる子供たちのほうがよっぽどやる気もあるし、活気で溢れている。自分が今何をすべきか、これから何に向かっていけばいいのか考えさせられた。日本語を教えにいった立場なのに逆にいろんなことを子供たちに教えてもらった。

カンボジアの人たちは日本人が持っていない優しさを持っていて、人の長所を見つけてとてもあたたかい人たちだった。異国の地でたくさんの人と出会い、いろんなことを話して笑ったりして一期一会をとても感じた。出会えたことに感謝し、人とのつながりを大切に、これからもこの関係を大事にしていきたいと思った。

あるスラム街の壁に“自分のことよりもまず、相手の気持ちを考えなさい”と英語で書かれていた。自分の一日をどう食いつないで一日でも多く生き延びようかを考えるのに必死な人たちに、果たして相手の気持ちを考えるだけの余裕があるのだろうか？人は一人では生きてはいけなから助け合って生きていこうということなのか。

このような場所にこの言葉があったことが何より衝撃的だった。

近いうちにカンボジアの村にも電気が通るようになるらしい。電気が通れば村も明るくなるし、夜になっても活気づくだろう。今よりもずっと便利な生活ができるようになっていくと思うが、カンボジアの人たちには絶対に物の大切さ、感謝することを忘

れないでほしい。どんどん便利になって恵まれた環境に囲まれると、いつの間にか身近な大切な何かをなくしてしまったり目標をなくしてしまうからだ。私はそれに気づくことができた。この貴重な体験ができたことに感謝したいし、もっと多くの人たちにカンボジアについて知ってほしいと思った。



カンボジアから帰ってから

任 利

カンボジアから3週間ぶりに日本に帰ってきましたが、心はまだ半分くらいはカンボジアのほうを向いています。目を閉じると、カンボジアの美しい風景や、のんびりした空気、子供たちの元気な声までがよみがえります。

社会的インフラ、経済構造、政治癒着、教育、所得格差、地域格差、国際関係、どれをとっても矛盾だらけで、この国ってどういう形で経済成長して、国際社会の中で影響力を深めていくのか、自分にはどうしても想像しにくいですが、この国を再生するのは教育しかないということだけは確かに思います。長らく続いた内乱のなかで学ぶ機会を失ったカンボジアの子供達に学ぶ機会を与えることはこの国の未来に貢献することであると思います。それも国際社会の安定と更なる発展に大きく寄与することとなると思います。

今回のボランティア活動を通して、私自身は自己啓発の機会が与えられ、自分自身

に生きがいを持ち、結果的に我ながら強くなったと思います。これからは、もっとボランティア活動をして、少しでも世界で苦しんでいる子どもたちの助けになりたいと思います。

2008年の夏、カンボジアボランティア活動に行ってきたと思いました。来年ぜひカンボジア日本友好学園に行きたいです。



Cambodian Sketches



Patrick Stephens:

An Old Dirt Road

An old dirt road leads to the Japan-Cambodia Friendship School. Each day motorcycles loaded with families travel the road to the parched rice fields in order to squeeze out every bit of the precious grain that helps life continue for the people of Prey Veng. Each day motorcycles pulling carts loaded with water, fruits, vegetables and livestock navigate the potholes in the road to safely bring these necessities to market. Each day children tow their friends or little brothers or sisters on bicycles along this road. They make their way to schools to study, their eyes filled with images and dreams of better things for themselves and their area.

We were just temporary travelers on this road - this road that after the daily rainstorm becomes a thick soup. Our feet were covered and our sandals heavy with the sticky brown clay. It wasn't easy to walk to our destination without falling, but we managed to make it. When one of us got stuck or had trouble getting through the slippery mess, someone gave a hand. When

someone found a better way through, they showed us.

I think back now at the Cambodian children, the field workers and the shopkeepers in the market who travel this road everyday. Their muddy feet and heavy loads don't seem to bother them. They were born along this road and are accustomed to it. When the rains make it difficult to travel, they take it slow. When things block their pathway, they simply go around them. This old dirt road leads to the Japan-Cambodia Friendship School, and that is sure to lead to better things.

The Honey Offering

We were sitting out on the veranda of the school one afternoon watching a particularly fierce thunderstorm roll through. Professors Saito and Someya were taking turns picking a guitar while the IC students talked with some of their Cambodian peers. The cool wind from the storm brought relief unexpected to all of us and woke us from our tired daze. The rain pounded the mud and grass just out from the roof we sat under.

Without notice, the three Cambodian students stood up, shed their clothes down to their shorts and ran out through the curtain of water flowing off the roof. They ran like kids through the rain jumping and chasing each other until we could no longer see them. Where did they go? This left us puzzled. Before we could say anything, however, they were running back through the downpour carrying something behind them. Then, in the middle of the field, they stopped, threw the mysterious object to the ground and bent down to it. A few seconds later, they were on their way towards us again. Back under the roof, they offered us a special treat. It was a beehive full of rich, sweet honey. We ate the hive and the honey until we were satisfied, and there was still a lot left for their other friends.

In the two weeks we spent together, the Cambodian university students impressed me countless times with their honesty, positive spirit and work ethic. But on that day, they impressed me with their knowledge of the world they live in. They didn't just pick that time to retrieve the beehive randomly. They knew the torrential rain would protect them from the bees' painful stings by not allowing them to fly. These Cambodians are still very connected to the resources God gave them, and they know where to get a tasty treat on a stormy afternoon.





Cambodian seventh graders.

Meney at the Gazebo

During the English sessions, Hanae and Hiromi and I had used large flash cards of animals to teach prepositions. Meney, a particularly bright and engaging girl, frequently volunteered to come before the class and perform for all of us. Teachers took turns telling Meney and other students, “Put the cat on the window,” “Put the dog on the chair,” “Put the elephant on the door,” etc. In the late evenings, several of us would gather in the beautiful new gazebo on the campus. A large colorful, circular pavilion, the gazebo reminded me of the old carousel in New York’s Central Park. Meney and other students came by to chat with the teachers who were resting in the shade. She practiced her newly learned English with us, “Put Harris on the ceiling,” she said laughingly.



Harris Ives:

Showering Beneath the Milky Way

Without electrical illumination, nights in Prey Veng are warm and dark – the perfect elements for a most pleasurable experience: an outside bath, under the brilliant stars. (Only the men volunteers could have this experience –the women used the few inside facilities.) Carrying an old metal basin in one hand, a towel and a fragrant soap in the other, I made my way to the well each evening about 10 o'clock. Wrapped about me was my Cambodian kroma (a large, simple, woven sarong-like cloth). Settling my things about the old well in a secluded corner of the Cambodia-Japan Friendship School, I proceeded with my ablutions: (1) pumping the water into the basin, (2) dousing, (3) soaping, (4) and then, rinsing three-times - there is almost a musical rhythm to the routine. At moments I would gaze directly up into the sky and behold the Milky Way.



Lesson Planning by Candlelight

You'd be surprised how much work a teaching team can accomplish while huddled about a novelty candle – a bear dressed in vest and trousers. Late into the evening, Hiromi, Hanae and Harris (we'er the three H's) sat at a candlelit table and reviewed the day's teaching. What impressed me most was the ladies' interest in pacing the lessons. They asked, “Do you think we need to spend less time on this part of the lesson, and add more time to the other activities.” Believing that the learning experience for these student-teachers depended more on their own assessment, I would throw the question back them, “I don't know, what do you think?” Evening after evening, they made adjustments to the teaching plans we had made a few months earlier. They learned that good teaching requires advance preparation as well as on-the-spot adjustments. I am proud of our English teaching team. As the bear candle burned down through the week, I felt that all three of us were more enlightened about the best approach to take with the eager





Riding on the Motoromo

The hour and a half trip to Neakleong was one of those thrills you never forget. Our group of 30 students and teachers arranged ourselves in two vehicles – the motoromo is basically a large flat bed truck with long benches facing each other. It was quite a balancing act to hang on to our seats as the truck bounced over the ruts in the dirt road. A time or two, the vehicles passed each other along the way, providing opportunity for picture taking. I smiled at Erika, Ai, and Azusa who seemed to be delighted in the moment.

Maya Dancing in the Washbasin

Last year, when I washed my clothes at the well, I did so while completely alone. I knelt beside the basin and did what I thought was the perfectly logical way to proceed – using my hands to swish the garments in the soapy water. This year, our group was larger; we had to line up to wash. Watching Maya and the other girls I had a “Naruhodo moment.” Maya stood up in the large basin in her bare feet. Agitating the soapy water with her dance, she was free to use her hands to wave at us.

The Golden Palm Fruit

Four of us were the special guests of Mr. Kong Vorn, the founder of the Cambodia-Japan Friendship School. Around noon, we walked the short distance from the campus with our host. He had promised only coffee, but his Cambodian hospitality was more expansive than that: he served a series of delicious meats and drinks. After enjoying the repas we walked around the neat and modest front and side yards, admiring his potato trees (yes, potatoes that actually grow as roots of trees – after harvesting, you simply stick the tree in the ground again to take root anew). Professor Fujita and I noticed the symmetrical palm trees growing in the front courtyard. There were two types: trees bearing green fruit, and



trees bearing golden fruit. Kong Vorn inquired: “Which do you prefer, the green or the golden?” I had never tasted the golden. The founder took my cue: he commanded that a golden palm fruit be cut for us. First we drank the juice (splendid); then we ate the “meat” (wonderful). Why should I be surprised that something golden is superior?



カンボジア日本友好学園 日本語・英語ボランティア08 会計報告 担当・大貴貴子、梶山真矢

		単位は全て us\$	
収入の部			
	参加者拠出金 \$74.2×20人 + \$91.5×6人	2040	
	友好学園施設使用料+寄付金用 88.5×26人	2300	
	岩間先生より寄付	20	
	IC 補助金 (学生企画奨励金 =10万円) (1\$=113.3円)	883	
収入計		5243	
支出の部			
	8月24日 食品(水、パン、牛乳)、蚊帳、たらい、バス代	153	
	8月25日 食品(水、果物、ミロほか)	20	
	8月26日 食品(水、果物、ラーメンほか)	15	
	8月27日 パン	2.5	
	8月28日 水、パン、バッテリーその他備品	44	
	8月29日 食品	5	
	8月30日 食事代前半分、大学生謝礼、モトロモ、食品	737	
	8月31日 食品(水、ドイツ、ミロほか)、モトロモ	42.5	
	ホテル	210	
	9月1日 パン、ガス	31	
	9月2日 パン	5.5	
	9月3日 食品	12	
	9月4日 パン	5	
	9月5日 水、バッテリー充電、牛乳	6.5	
	9月6日 食事代後半 (2食=\$4)	648	
	大学生謝礼+ガソリン代 10\$ (学生1日=\$4)	146	
	坂本さんお礼	50	
	友好学園施設使用料 (寄付)	1700	
	バス2台	160	
	食事会 (KhmerKitchen)	315	
	9月7日 スラムの学校に寄付	300	
	孤児院寄付	300	
	tuktuk	75	
支出計		4983	
収支差引		260	

以上が8月24日から9月7日までのプログラム本体の経費計算。ただしプノンペンでのホテル代(1泊12ドル程度×3泊)は部屋によって料金が少々異なったため、個人払いとしました。このほか実際には日本からの渡航費(7万円~10万円)、ビザ代、シェムリアップ観光費用などを各自が支出している。

なお、残額の260ドルは渡航前に日本で行った準備の買出し(総額327ドル)の清算の一部に当てた。

アジアンボランティア・サポート基金から各参加学生に2万円の補助金を支給する予定。

参加メンバー

文化交流学科 2年・鈴木麻由 3年・橋本麻美、平根拓也、梶山真矢、越沙央里、金子竜也、大竹貴子、坂本亜希子、和田未萌

現代英語学科 2年・鴨志田純沙 4年・本多亜依、永井広美、大貴貴子、鈴木恵利華

児食物健康科学科 4年・塚田信

看護学科 1年・吉田優

東海大学健康科学部看護学科 3年・金澤悠

慶應義塾大学経済学部 3年・向恒生

青山学院大学国際政治経済学部 3年・藤田花江

教員 Harris Ives、Patrick Stephens、任利、藤田悟

部分参加 岩間信之 斎藤聖二、染谷智幸

